

へ導入機移植ロボ自動

てん菜

畦てん菜移植機で、生産者8戸が95畝、うち直播(ちよくは)25畝を作付け、短紙筒狭畦栽培を組み合わせた省力化を目指す。今後、機能などの改善点を確認し、新機種として来年から本格的に稼働させる考えだ。

革新的技術開発・緊急展開事業の経営体質強化プロジェクトで2年目の実証試験を担当する、オホーツク管内JAつべつでは、てん菜全自動ロボット移植機を使ったてん菜の定植作業を進めている。国内初の6畦狭

JAつべつ 本格稼働に意欲



てん菜全自動ロボット移植機での定植作業(津別町で)

省力化めざし実証試験

開発を担当するのは滝川市のサークル機工。作業員1人が乗り込み、一度に27個の苗コンテナを積み、8時間で約4・2畝を定植できる。従来の最大機種より3割増の能力があるという。秋には昨年導入し実証試験した、ドイツ製の大型高効率6畦狭畦てん菜収穫機で収穫する。

てん菜65畝を栽培する同町の希来里ファームは

11日、移植機を使って定植した。衛星利用測位システム(GPS)を搭載したトラクターで作業した野宮裕一副代表は「新たな知識などを得るのに苦労するが、最新式の機種で生産能力を高めた」と話す。佐野成昭代表は「今後は、てん菜の移植と収穫をコントラクター(農作業受託組織)に委託して労働力を他の作物に振り向けたい」と

期待を寄せる。短紙筒狭畦栽培は、長さ10畝(国内13畝)のペーパーポットに入った苗を株間50畝(同60畝)で定植する。10畝8000本(同7000本)を移植できる。省力化などが期待されており、昨年の実証試験では、生育に問題がないことが実証されている。

JA営農支援室の有岡敏也審査役は「新たな栽培方法で重労働や労働力不足を解消し、組合員の所得向上につなげたい。てん菜の作付面積も確保できると思う」と強調する。